

## Harvard 大学の上海分校オープンについて

2010年3月18日 Harvard 大学上海分校がオープンした。Harvard がその本拠地ボストンの Cambridge 以外にキャンパスをオープンしたのは Harvard の歴史上始めて以来のことである。その第一のオープン先が中国の上海である。(なぜ北京でないかは、敢えて書かないが。)

私は Harvard 大学の総長、BusinessSchool の Dean、LawSchool の教授、Harvard の College の教授らと共に Harvard 大学上海校の Opening Ceremony に出席した。

この分校は中国の経済の中心地浦东地区にある HSBC (香港を拠点とする世界的な銀行) の5階にある。何とここに階段教室、大会議室、小会議室、カフェテリア等々全フロアを貸し切って Harvard 大学が海外分校をオープンした。中国人も自由に討議に参加できるように全ての教室、会議室に英中同時通訳設備のブースを導入している。

この資金は HarvardChinaFund が出資し、また Harvard と HSBC の密接な結び付きからも実現したものと思われる。HarvardChinaFund は中国の多くの企業が一口5億円規模で出資した Harvard 大学と中国を結び付ける基金である。中国関係の Harvard の教授たちの研究を支援すると同時に、Harvard の大学生が中国で勉強し、また中国からの Harvard への留学生を支援し、中国及び Harvard の強力な関係を樹立することを目的として設立された。

Harvard 大学では中国語をしゃべれる教授が70名にのぼり、中国からの留学生の数は日本からの留学生の数の今や20倍にも至ろうとする勢いである。また中国の名門大学である北京大学、精華大学、上海交通大学、復旦大学等々との交流も極めて密接に行なわれており、中国関係のコースは Harvard 大学全体で79科目にのぼっている。

私が30年前に Harvard 大学 LawSchool に留学した時は中国の影も形もなかったことと比べると、現在の Harvard と中国の結び付きには目をみはるものがある。

思い出せば、Harvard と日本の結び付きの良い時代がその昔には存在

した。ライシャワー時代及びエズラ・ヴォーゲル時代である。しかし、エズラ・ヴォーゲルが「JapanasNo.1」を書いた後から、日本は完全な老害国家、下降国家、各種制度の硬直国家となり、常に先を見つめている Harvard 大学からは無視された状況になった。

今や、次に Harvard が分校を出すとすれば、それはムンバイであると言われている。その証拠にこの Opening Ceremony には多くのインド人、インド系教授、インド人学生の姿が見られた。Harvard の総長や次々に挨拶に立つ Harvard の各学部の学部長の話の端々に Harvard は、中国とインドと共に世界の学界をリードして行く変わらない意欲が感じられた。

そういえば日本に立寄った Harvard 大学総長の歓迎レセプションで挨拶に立った日本の方々は、こう言っては失礼だが、非常に「ご高齢な」方ばかりであった。具体的に名前を挙げると失礼だから書かないが。これに反して上海分校 Opening Ceremony に出席したのは若者が非常に多かった。20 台、30 台、40 台の若者の活気に満ちていた。

このような形で Harvard に見捨てられた日本関係者からは「どうせ金があるから中国になびいているだけだ。」という皮肉めいた口調も聞かれたが、Harvard 関係者にこのことを直接聞いてみると、「日本の学生や大学生、大学教授らに研究への意欲と活力及び知的刺激が最近はめっきりと感じられなくなったので」という答えが返って来た。

日本の出席者から「日本経済建て直しの為にはどうすれば良いのかコメントをいただきたい。」という質問が出たが、Harvard の現総長の答えは「そんなことは私の前任者、前総長に聞いてくれ。」と軽くいなされてしまった。Harvard の前総長は有名なサマーズ元財務長官である。これはジョークの答えと受け取るべきではなく、Harvard の現総長には「日本経済がどうしたら立ち直るか」という質問には全く興味がないという答えだと受け取るべきだったのである。

以 上